

2017年度に全国の児童相談所が対応した虐待は13万3778件(速報値)で、過去最高を更新した。統計を始めた1990年度から27年連続の増加だ。17年度の虐待対応の中では、配偶者への暴力で子どもがストレスを受ける「面前DV」や無視、暴言などの心理的な虐待が全体の54%を占めた。面前DVは心理的虐待と認知されたことで通告が増え続けている。

院内児童虐待防止委員会を設置 虐待の早期発見・予防活動を推進

全国各地で虐待防止のための様々な取り組みが行われているが、函館中央病院(本橋雅壽病院長)は、2010年に児童虐待の防止と早期発見を目的とした「院内児童虐待防止委員会」を設置し、虐待の早期発見と保護者への子育て支援を通じた予防活動を積極的に推進してきた。

道南唯一の総合周産期母子医療センターの認定を受けている同病院は、未熟児・新生児や一般小児科、小児神経や小児循環器、食物アレルギー、発達障害、臨床遺伝など、子どもの病気のほとんどに対応している。委員会のメンバー

は医師や看護師、助産師、医療ソーシャルワーカー、事務部門スタッフなどで構成されている。毎週水曜日に開催される子育て支援検討会で支援が必要として取り上げる件数は毎年100件を超える。同病院では院内の職員が発見した場合には児童虐待防止委員会の事務局(医療福祉相談室)に連絡、判断に迷うケースは入院観察を試みたり、委員会メンバーによる院内検討会を開き、必要な虐待の場合や親との対峙が必要な際の緊急対応の必要性が高い場合、一時保護要請の対象となるような虐待については直ちに児童相談所や警察へ通報をする。児童相談所への虐待、育児放棄(ネグレクト)、性的虐待などだ。

委員会設立の目的について、同病院小児科医長の石倉垂矢医師は「虐待判断に迷うことから虐待の見逃ごしを避けることになりました。そのためには虐待の前段階で拾い上げることができるよう、先手の虐待予防の仕組み作りにも取り組んでいます」と話す。委員会の設置以降も院内検討会の回数は増加の一途をたどっているが、その背景の一つとして若い女性の

児童相談所との勉強会のスタートが出发点

院内児童虐待防止委員会の設立以降、虐待の早期発見については院内各診療科の連携も進んできたが、対外的な協力関係などの面では、石倉医師は児童相談所とのコミュニケーション不足を感じていた。そこで、児童相談所との勉強会をスタートさせたが、この勉強会が後に「チャイルドファーストはこだて」として継続・発展していった。「児童相談所はどうしているか、お話をしているのか。その疑問が出发点です。児童相談所にとって

りません。病院と児童相談所はお互いに理解することが必要だと考えたからです」。

2015年8月に顔合わせ会、1回目の勉強会は函館児童相談所所長の阿部康子さんが関わった「医療機関と児童相談所が関わる1事例について」だった。2回目は院内児童虐待防止委員会の活動について、事務局を担う医療ソーシャルワーカーの役割を同病院医療福祉相談室室長の田中博光さんが話をした。3回目と4回目は医療機関向け虐待対応プログラムであるBEAMS Stage1について石倉医師が講師を務めている

be amには「光の束」という基本的な意味の他に「屋根の梁」や「心からの笑顔」という意味があり、複数形であるBEAMSには「皆で虐待の問題に光をあて」「崩れゆく家庭を支え」「子ども本来の笑顔を取り戻してほしい」という意味が込められている。

「Stage1はすべての医療関係者が対象です。受講者が虐待の早期発見と通告の意義を理解し、医療機関でのShoutline(歩哨・見張り番)として適切な行動がとれるようになることが目標で、一人でも多くの医療関係者に子ど

も虐待について、考えるきっかけになることを目指します」。BEAMS Stage1はその後も2回行われたが、BEAMSの講師の資格を持っているのは、道内では石倉医師だけだ。

虐待に関係する様々な職種の人々が勉強会の講師を担当

児童相談所の機能の説明を受け施設を見学する勉強会は2回実施した。同病院からは児童福祉法に基づいた養育上の公的支援を妊娠中から必要とする環境にある特定妊婦に対して、産科外来初診から出産後の小児科外来通院まで、どのように関わっているかについて説明をしている。同病院以外の医療者では、「暴力防止と人権について」を湯の川女性クリニックの小栗松洋子院長、「子どもの口の中から見た児童虐待の早期発見について」をカワムラ歯科クリニックの川村曜補院長から話を聞いた。勉強会の講師は医療者や児童相談所以外の子どもに関係する様々な職種の人々が担当するようになり、性犯罪に対する警察の取り組みについては北海道警察函館方面本部生

活安全課の担当者から聞いている。「昨年10月には一言葉ひとつで子どもは変わる」の著者で、福岡県警察少年課北九州サポートセンターの安永智美さんを講師に招きました。子どもを犯罪の被害者にも加害者にもしないための少年相談や立ち直り支援、補導活動などを行っている安永さんの講演には、多くの参加者が心を揺さぶられま

した。昨年12月のテーマは司法面接でした。子どもからの被害の聞き取りは、子どもからの負担減少を目的に3者合同面接が行われていますが、その聞き取り手法は一般的にはあまり知られてはいません。性被害を疑った場合の子どもへの聞き取りを最小限にするという理解はRIFCR(リフカー)性虐待が疑われる子どもに対して、ど

のように面接し、何を聞くべきで何を聞くべきではないかということを中心とした半構造化した虐待発見時の面接プロトコル」の広がりと共にこの地域にも浸透してきましたが、その先にある児童相談所や警察、検察の聞き取りが子どもに配慮されていることを学びました。元北海道警察函館方面本部長の小笠原和美さんは権利が奪われそうになったときに相手の権利を奪わずに自分を守る方法である「NO(いやだと言う)」「GO(その場から逃げる)」「TELL(信頼できる大人に話す)」の3つの具体策の重要性を語ってくれました。

学校現場における児童虐待の経験例には活発な議論も

参加者も病院や訪問看護ステーション、児童養護施設、高齢者施設、乳児院、市役所、保健所、学童保育所、小中高・大学の教師や学生、ウイメンズネット函館、警察、検察、少年刑務所、鑑別所など、子どもに関係する多くの職種の人々が毎回100人前後も参加するようになった。「今年6月は七飯養護学校おしま学園分校の小



小児科医長の石倉垂矢医師。

『チャイルドファーストはこだて』

「チャイルドファーストはこだて」の勉強会一覧

2015年10月から2018年10月まで

テーマ	講師等
1 医療機関と児童相談所が関わった事例について	阿部康子(函館児童相談所所長)
2 院内児童虐待防止委員会の活動(事務局を担う医療ソーシャルワーカーの役割)	田中博光(函館中央病院医療福祉相談室室長)
3 BEAMS Stage1(医療機関向け虐待対応プログラム)について	石倉垂矢子(函館中央病院小児科医長)
4 BEAMS Stage1(医療機関向け虐待対応プログラム)について	石倉垂矢子(函館中央病院小児科医長)
5 児童相談所の機能の説明や施設見学	阿部康子(函館児童相談所所長)
6 特定妊婦(産科外来初診より、出産後の小児科外来通院まで、どのように関わっているか)	函館中央病院院内児童虐待防止委員会
7 性犯罪に対する警察の取り組み	北海道警察函館方面本部生活安全課
8 子どもの力を信じて～暴力防止と人権	函館YWCA・CAPグループ 小葉松洋子(湯の川女性クリニック院長)
9 ①BEAMS Stage1(医療機関向け虐待対応プログラム)について ②CAPプログラム(子どもへの暴力防止プログラム)	石倉垂矢子(函館中央病院小児科医長) CAPグループ
10 児童相談所の機能の説明や施設見学	
11 子どもの口の中から見た児童虐待の早期発見	川村曜補(カワムラ歯科クリニック院長)
12 他機関連携で子どもを守る～非行少年と虐待～	安永智美(福岡県警察少年課北九州少年サポートセンター)
13 司法面接～児童相談所・警察・検察による連携～	森みどり(函館児童相談所所長)、警察、検察
14 地域を知る。資源を知る。互いを知る。自分を知る。子どもたちのために	参加者全員で自己紹介
15 BEAMS Stage1(医療機関向け虐待対応プログラム)について	石倉垂矢子(函館中央病院小児科医長)
16 児童虐待にどう向き合おうか～学校現場の実践と研究から～	小林靖子(七飯養護学校おしま学園分校) 中村直樹(北海道教育大学函館校)
17 この地域における非行の支援	児童相談所、大沼学園
18 この地域における非行の支援	弁護士、警察、少年鑑別所

靖子さんと北海道教育大学函館校の中村直樹さんに、それぞれ「学校現場における児童虐待の経験から」と「学校現場における児童虐待対応と国内外の研究・実践動向から」と題して、学校現場の声を聞きました。児童虐待の通告件数が増加するなか、学校現場では虐待対応に多くの教師のエネルギーと工夫が注ぎ込まれてきました。近年の児童虐待に対する介入や臨床、研究に関する事実と学校現場が取り組んできた経験に注目することで、参加者を交えて活発な議論となるなど、児童虐待の理解と対応に必要な視点を共有する契機になりました。

8月と10月は「この地域における非行の支援」をテーマに開催された。実際に非行と思われる子どもは警察や児童相談所につなげた後にどのように支援されるのか。児童相談所や大沼学園、弁護士、警察、少年鑑別所の担当者から話を聞いた。「非行は虐待を受けた後の行動である可能性がります。つまり、子どもの苦しみの表現なのかもしれません。この地域で行われる支援や取り組みを知ること、私たち一人ひとりが気づき、そしてつなげる勇気が持てるのだ

と思います」。

子どもに関係する多くの人と協力する関係が生まれてくる

2カ月毎に開催されている「チャイルドファーストはこだて」の勉強会では、石倉医師は特に初めて参加する人には積極的に声をかけ、自己紹介の時間をもうけている。その繰り返しが顔の見える関係の構築に結びついていると石倉



総合医療支援センター医療福祉相談室の藤井三四郎さん。

医師は強調する。勉強会終了後に行われる懇親会も恒例となった。「こういう集まりを望んでいた」「きっかけになった」「仕事のあとで、疲れているときも参加した」と、参加者からは勉強会を高く評価する声も聞かれた。「虐待から子どもを守るには医療機関や自治体や保健所、福祉、児童相談所、学校、警察などが地域ネットワークを作り、連携することが必要不

可欠ですが、チャイルドファーストはこだてによって、子どもに関係する多くの機関、そこで働く多くの人たちが協力する関係が生まれてきました。これからは本人も虐待を受けた子どもたちをサポートするために活動を続けていきます」。

チャイルドファーストはこだての事務局を担当する同病院総合医療支援センター医療福祉相談室の藤井三四郎さん(社会福祉士)は「チャイルドファーストはこだてのような民間主導の勉強会で、地域の子どもの関係する多くの職種の人々がこれだけ集まるのは全国的にも珍しい取り組みだと思います。そして、こんなに子どもを思っている大人が函館にいるというところ。地域の子どものことを思っている人が多いというところを実感しました」と語る。チャイルドファーストはこだての参加者は児童相談所など転動する人も多くなります。この会を継続していくことが重要だと考えます。これからは最初の始めた頃の熱い気持ちを忘れないうようにしたいです」。